

ナチュラルキス  
～新婚編5～

1 照れ隠しの暴挙  
（沙帆子）

「沙帆子、沙帆子……」

愛しいひとの声が、意識の中に入り込んでくる。

心地よい眠りに浸っていた佐原沙帆子は、うつすら瞼を開けた。

う……ん？

ゆらゆらと身体を揺さぶられている。まだ取りついている眠気を払おうと瞬きしていたら、「起きたな」と沙帆子の夫である啓史の声がした。

「せ……ん、あふっ……せい」

言葉の口にしながらか、とんでもなく大きな欠伸をしてしまい、沙帆子はハツとして口を覆った。

わっ、わたしってば……佐原先生の前で、大口開けて欠伸しちゃうなんて。

目を開けた途端、啓史と目が合った。その近さに、バクンと心臓が跳ねる。

うわーっ、ワイシャツをラフに着崩した佐原先生、今朝も素敵でいらっしやる。

沙帆子は胸を高鳴らせ、啓史にぼおっと思惚れてしまう。

「ほら、時間がなくなるぞ。さっさと起きろよ」

甘味成分ゼロな言葉を吐き、啓史はさつさと寝室を出ていった。  
なんとも物足りない気分になる。

なんかつまらない。もうちよつとくらい甘くてもいいと思うんだけど……  
だって結婚式を挙げてから、まだ十日。わたしたち、ぴつかぴかの新婚さんなんだもの。朝の目覚めに、ささやかでもスイートな気分を味わいたいのになあ。こんな望み、贅沢かな？

佐原先生と一緒に住んでいる時点で、とんでもなくしあわせではあるんだけど……  
そんなことを思いながら、ベッドから出ようとした沙帆子は、自分の着ているものに眉を寄せた。これ……先生のパジャマだ。なんでわたし、先生のパジャマを着てるんだろう？

でも、先生のパジャマを着て目覚めるなんて、なんだか特別な感じがする。

沙帆子は、ルンルン気分で居間を覗き、啓史を探した。だが、そこに彼はいなかった。

先生、もう着替えは終えていたし……仕事部屋かな？

沙帆子は洗面所に向かおうとしていた足を止めた。リビングでふんぞりかえっている、でかうさを見る。でかうさとは、結婚祝いに貰ったピンクの大きなぬいぐるみのことだ。

せっかくだし、朝の挨拶をしようかな。

沙帆子は急いで、でかうさに駆け寄り、その手を取る。

「でかうさ、おはよう。なかなかかまってあげられなくてごめんね」

でかうさのことが気に入らない啓史に見つかると、色々な意味で気まずいので、挨拶と謝罪を早口に告げる。

沙帆子は背後を振り返り、啓史がいないことを確認してから、でかうさにぎゅっと抱き着いた。

「ふふっ、やっぱりでかうさは抱き心地がいいな」

につこり突つてでかうさから身を離れた沙帆子は、次にソファに座っている祖父母のオーストラリア土産のコアラのぬいぐるみの頭を撫でた。

そのあと沙帆子は、急いで洗面所で顔を洗い、着替えのためにクローゼットルームに行く。

今日着ていく服を選んでいたら沙帆子だが、ふとその手を止めた。

啓史の伯父夫婦が以前住んでいた家が、学校のすぐ側の果樹園にあり、沙帆子は毎朝そこで制服に着替えることになっている。なので、マンションからは私服を着て出るのだが、私服で学校に向かうということにどうにも違和感があり、落ち着かない。

用心のために、卒業するまでずっと続けることになるんだろうけど……そのうち慣れるのかな？  
ため息をつきつつ啓史のパジャマを脱いだ沙帆子は、唐突に昨夜のことを思い出した。

「せつ、先生の白衣！」

叫んだ沙帆子は、慌てて着替えを済ませ、クローゼットルームを飛び出て寝室に駆け込んだ。

昨夜、啓史は沙帆子の望み通りパジャマの上に白衣を羽織ってくれた。だけど啓史は、写メを撮る前に沙帆子を抱き上げてベッドに運び……そのままエロティックな時間に突入してしまつて……  
そのときのことを思い出し、頭が沸騰しそうになった沙帆子は、自分の頭をポカポカ叩いた。  
もおっ、駄目駄目！ いまはそんなこと思っている場合じゃないって。

なんとか気持ち切り替えた沙帆子は、白衣を探してベッドの周辺を見回す。しかし、どこにも

見当たらなかった。

これはつまり、先生が片付けてくれたってことだよ。でも、きつとくしゃくしゃになってるはずだ。だって、白衣を着たまま……

頭の中にもやもやと浮かび上がる昨夜の映像を、「うわーっ、うわーっ！」と叫んで蹴散らす。も、もう一度アイロンを……い、いや、それじゃ駄目だ。もう一度洗濯したほうがいい。

「沙帆子、お前、まだ寝て……」

そんな呼びかけとともに寝室のドアが開き、啓史が顔を覗かせた。

「なんだ、もう着替えてるじゃないか」

「は、はいっ！」

「お前いま、叫んでなかったか？」

しっ、しまった！ 仕事部屋にいた啓史にまで、声が聞こえてしまったらしい。

「あ、あの。は……」

白衣と言おうとしたが、口にできずに終わる。

「うん？」

「そ、その……」

「ああ、わかった。制服のことか？」

せっ、制服？

「忘れたら大変だからな。紙袋に入れて玄関に置いていたぞ」

ああっ！ わたしの制服も先生の白衣同様、ベッドの周りに脱ぎ捨てて、そのままだったんだ！

「し、しっ、し、皺しわに……」

昨夜の状況を考えて狼狽ろうばいしてしまい、思わず囁ささんでしまう。

「シャツは少し皺しわがついていたが……そんなに気にするほどじゃ……」

「きっ、気にします！」

叫んだ沙帆子は、玄関に飛んで行った。

そこに置いてあった紙袋には、制服が畳んで入っていた。

あー、わたしの考えなしっ！

冷静に考えたら、制服を着たままベッドインとか……ありえないよお。

これを着て学校に行かなきゃならないのに……それで授業を受けなきゃならないのに。

うわーっ、考えただけで顔から火が出そうだ。

「おい」

制服を手に、ぐるぐると考え込んでいたら、啓史が沙帆子の肩に手を置いてきた。

「大丈夫だっただろう？ 皺しわくちやと言うほどじゃ……」

「先生の白衣はどうしたんですか？」

鬼気迫る顔で問い質たしたら、啓史は戸惑ったように口を開く。

「そっちは、今日必要ってわけじゃないから、クローゼットルームに置いていたけど」

先生の白衣とわたしのシャツは替えがあるから洗濯できるけど、制服は一張羅いっしょうらだ。これを着るし

かないんだよね。

よし、学校ではできるだけ思い出さないようにしましょう。

いつまでもこのことにこだわっていても仕方ないので、沙帆子は無理やり心に折り合いをつけた。

「それじゃ、朝食の準備をしますね」

沙帆子は啓史に言い、急いでキッチンに向かう。

「手伝わなくていいか？」

声をかけられ、沙帆子は啓史を振り返った。

「はい。昨日、ママからおかずを貰<sup>も</sup>ってきたので、それほど手間はかかりませんから」

「そうか、それじゃ、俺は仕事部屋にいるからな」

そう告げて、啓史は仕事部屋に消えた。閉じたドアを見て、思わずため息が出た。

まったく、先生ときたら、わたしが何を気にしているのか、まるでびんとこないみたい。それとも、わたしと違って全然気にならないのかな？

予定より早く朝食の準備が整い、沙帆子は仕事部屋へ啓史を呼びに行った。

ドアをノックしようとしたところで、前に啓史から、『いちいちノックなんてしなくていいぞ。入りたかったら遠慮せずに入ってきて来い』と言われたことを思い出す。

でも、だからって、パツと開けて入るといいうのも躊躇<sup>ためら</sup>われるし……

「あ、あの、先生？ 朝食できましたよ」

閉じたドア越しに、声を張って呼びかける。

「わかった。すぐ行く」

そう返事が聞こえ、沙帆子はほっとして居間に戻った。

啓史はほどなくやって来た。テーブルに並べてある朝食を見て、彼は目を輝かせる。

「美味<sup>うま</sup>そうだな」

そんな言葉をもらい、喜びで胸がいつぱいになる。

そういえば、初めてふたりでご飯を食べたときの先生は、なんか機械的に食べ物<sup>たべもの</sup>を口に運んでるみたいを感じたけど……いまはそんなことはない。

「うん？ どうかしたか？」

朝食を食べずにじつと啓史を見つめていたら、それに気づいた啓史が眉を寄せて問いかけてきた。

「あ……いえ」

『なんでもないです』と口にしようとした沙帆子だが、考え直し、思っていることを素直に告げる。

「その……先生、前よりずっと美味<sup>おい</sup>しそうに食べるようになったなって思ってる」

啓史は何も言わずに沙帆子を見つめてきた。その視線にもじもじしていたら、啓史が口を開く。

「そうだな。……たぶん」

「たぶん？」

「いや、なんでもない」

「でもいま、先生、たぶんって……」

思いきって追及したら、啓史は顔をしかめた。不機嫌になってしまったのかと不安になったが、彼はコーヒーを飲み、沙帆子を再び見つめてくる。そして……

「……お前がいるからだろ」

そ、それって……わたしと一緒だから美味いって、言ってくれてるんだよね？

喜びが湧き上がり、頬が紅潮してくる。熱っぽくなった頬を冷まそうと手のひらを当てていたら、きゅつと鼻を摘つままれた。

「うっ！ せつ、先生、急に何するんですか？」

「朝っぱらから、恥ずかしいことを言わせるんじゃない！」

頬をほんのり赤くした啓史から理不尽に怒鳴られ、沙帆子は唇を尖とがらせたものの、内心嬉しくて仕方なかった。

照れ隠しの暴挙なら、大歓迎だ。

## 2 未来を憂慮ゆうりょ 　　啓史

クローゼットルームのドアを前にして、啓史は壁に凭たれた。

すでに学校に行く準備は整っている。あとは沙帆子が化粧を終えて出てくるのを待つだけだ。

沙帆子はいつも、クローゼットルームに籠こもって化粧をする。化粧をしているところを啓史に見ら

れたくないようだ。

啓史は腕時計で時間を確かめた。沙帆子が化粧を始めてそろそろ二十分が経過する。彼女は慣れない化粧にいつも手こずっているみたいだ。

薄い化粧ならそんなに大変ではないのだから、沙帆子だとわからないように、かなり濃い化粧をする必要があった。

まだ高校生の彼女に、こんな負担をかけてしまっていることを済まないとと思う。

俺にまるで余裕がなくて……結婚を急いだからな……

沙帆子が俺に好意を寄せてくれていることを、初めから知っていれば、俺はいくらでも待てたのに……

そう考えた啓史は、自嘲して顔を歪ゆがめた。

俺ときたら、よく言う。いくらでも、なんて到底無理なくせに……

啓史は、自分の手のひらを見つめ、ぐつと握り締めた。

願っていた以上のしあわせを手に入れたいま、もう絶対に手放したくない。

今朝も、啓史のパジャマを着て自分の隣に寝ている沙帆子を見て、しあわせを感じた。ずっとその寝顔を見ていたかったが、学校があるため彼は仕方なくベッドを出たのだ。

しかし、ベッドの周りには、脱ぎ捨てられた白衣や彼女の制服が散らばっていて、昨夜のことを思い出してしまつて……

もちろん、朝っぱらから沙帆子を襲うわけにはいかないから、急いで散らばった衣服を片付け、

彼女を起こす時間になるまで仕事部屋に引っ込んでいたのだ。

そして時間になり、沙帆子を起こしてやるときも、おかしな気持ちになる前に急いで寝室を出た。いまこうして冷静になってみると、欲望に振り回されているようで、腹が立つ。

だが、そんなことにもしあわせを感じている自分に、啓史は苦笑した。さて、そろそろ出て来てくれないと、困るな。

啓史は凭<sup>もた</sup>れていた壁から身を離し、クローゼットルームのドアを軽くノックした。

「沙帆子。まだ終わらないのか？」

「は、はい。……す、すみません。なかなか……」

なかなか？ 首を傾<sup>か</sup>げていると、心底困ったような声が聞こえてきた。

「これでいいのか駄目なのか、なんかもう、よくわからなくなっちゃって」  
やれやれ……

「開けるぞ」

そう声をかけ、啓史はドアを開いた。姿見の前に座り込んだ沙帆子がこちらを振り向き、目が合った。その瞬間、沙帆子は焦ったように俯<sup>うつむ</sup>き、両手で顔を隠す。

啓史は沙帆子に歩み寄った。

「ほら、見せてみる」

「で、でも……」

「見ないことには判断できないだろ」

そう言って手を伸ばすが、沙帆子は顔を隠して逃げようとする。

痺<sup>しび</sup>れを切らせた啓史は、彼女の両方の手首をガシツと掴<sup>つか</sup>んだ。

「あっ！」

慌<sup>あわ</sup>てたように叫んだ沙帆子は、啓史と目を合わせて気まずそうな顔をする。

「なんだ、いいじゃないか」

啓史の言葉に、沙帆子はおずおずと問い返してきた。

「……いい？ほんとに？」

啓史は笑みを見せて頷<sup>うなず</sup>く。

正直なところ、目の周りの化粧はいまいちだったが、どうせ、この化粧は果樹園に着くまでのもの。それに、俺にはどんな沙帆子も……

「目の周りが、パンダみたいじゃないですか？ なんか滑稽<sup>こっけい</sup>な気がするんですけど……」

こいつ、そんな面白いことを、しょぼくれた顔で言うんじゃない！

いまにも笑い出しそうになり、啓史は沙帆子をぎゅっと抱き締めた。

「えっ？ せつ、先生？」

戸惑っている沙帆子を抱き締めつつ、気づかれないように笑いを噛み殺す。収めきれなかった笑いで身体が震えそうになったので、啓史はそれを誤魔<sup>ごま</sup>化<sup>か</sup>すために沙帆子の背中をポンポンと叩いた。

「さあ、学校に行くぞ」

そう声をかけて、啓史は沙帆子を離す。ふと悪戯<sup>いたづら</sup>心が湧き、沙帆子の唇に軽くキスをした。

「わっ」

驚いた沙帆子が小さく叫ぶ。

ふっと笑うと、沙帆子は恥ずかしそうに啓史を見て、今度は「あっ」と声を上げた。

「うん？」

「あ……その……先生の唇に、ちょっとだけ口紅が……」

その指摘に、啓史はくいつと眉を上げ、姿見で確認してみた。確かに赤くなってる。

啓史は沙帆子の手を取ると、戸惑っている沙帆子を楽しみながら、その手のひらに自分の唇を押しつける。

仰天している沙帆子の手のひらを見ると、赤い色がついていた。

「どうだ、取れたか？」

「せ、先生！」

文句を言う沙帆子の頬は真っ赤だ。

「そんなんじゃ、口紅は取れませんよ」

啓史は澄まして頷いた。実のところ、わかっていてやったのだ。

「ああ……そうだったな。クレンでないと取れないんだっただ」

にやつきながら言ったら、沙帆子がむっとして睨んできた。

「その話は、もう忘れてください」

ふてくされたように頬を膨らませている沙帆子が楽しくて、啓史はくすくす笑った。以前、沙帆

子がクレンジングのことをクレンと言ったことがあり、何度かこのネタでからかっていたのだ。

「お前の反応が面白いから、忘れようにも忘れられないんだ」

「そ、そんなあ」

「それより、これなんとかしてくれ」

啓史は自分の唇を指さして沙帆子に頼んだ。

キスしなければよかったのだから、誘惑に勝てなかったのだから、仕方がない。

沙帆子はウエットティッシュを手に取り、恥ずかしそうに啓史の唇を拭いてくれる。

「ウエットティッシュで、口紅が拭き取れるのか？」

「これは、クレンジングシートなんです。これも化粧落としなんですよ」

「つまり、それがあれば、お前が口紅をつけてても、俺はキスを躊躇う必要はないってことだな」

「せ、先生ってば」

「ほら、もう出発するぞ」

啓史は笑いながら沙帆子を促し、家を出た。

玄関を出て駐車場に向かっていた啓史は、少し離れたところにいる女性が、こちらを見ているのに気づいた。その女性からは、これまでに何度か話しかけられそうになり、そのたびに知らぬふりをしてきたのだが……どうも沙帆子のことを気にしているようだ。

啓史は、その女性の視線を無視し、沙帆子を車に乗り込ませる。

「せん……」



「しっ！」

『先生』と言いつつになつた沙帆子を黙らせた啓史は、運転席に乗り込むと、すぐに車を出した。マンションを少し離れたところで、先ほどの女性のことを沙帆子に伝えた。

「そ、そうだったんですか……あの、大丈夫ですよ？」

「大丈夫だろうが……ただ、俺たちのことを、気にしていたのは確かだから」

正直に言うと、沙帆子の目が不安そうに揺らぐ。

「心配するな。なんで気にしていたのか理由はわからないが……不審に思われるようなことは何も  
ないはずだ。それに、わざわざ俺たちの身元を詳しく調べたりもしないだろう」

「で、ですよ」

「ああ」

沙帆子を安心させようと頷いた啓史だが、内心では軽く考えるべきではないと気を引き締めた。

昨日だって、沙帆子が俺のセーターを着ていただけで、とんだ騒ぎになつたのだ。

まさか、沙帆子が着ていたセーターが、俺の着ていたセーターに似ていると指摘する生徒がいたとは……信じられないよな。

ふたりが結婚した事実は、絶対に周囲にバレてはならない。そうわかつていたはずなのに……俺は愚かなほど軽く捉えていたようだ。世の中の人間が、あんなにも噂好きだとは思わなかつた。他人のことに首を突っ込んで、何が面白いんだか。

だが、面白がつて探ろうとする者がいるのであれば、こちらもそれなりの用心が必要になる。

俺は何がなんでも、沙帆子を、そして彼女との生活を守る。

そのためには、どうするのが一番いいのか、早急に考えて対処すべきだろう。

俺たちに関心を向けていた先ほどの女性のこともある。人の目を気にしながら暮らし続けるのは、かなりのストレスだよな。結局、果樹園の家に住まわせてもらうのが一番ってことか……

そう考えた啓史は、顔をしかめた。

正直、安全という意味では、ふたりが別々に暮らすのが一番なんだよな……

沙帆子が伯父貴の家に下宿させてもらって、俺はここで一人暮らしを続ける。冷静に考えれば、  
そうするのが正しい。だが……

くそっ！ こいつと別々に暮らすなんて、受け入れたくない。

もしかしたら、俺の両親も沙帆子の両親も、伯父貴たちも……そのことをすでに視野に入れて  
いるんじゃないのか？ ただ、俺たちに言わないだけで……

伯父の家に用意されつつある沙帆子の部屋、そして啓史の両親の家に用意された沙帆子の部屋が  
思い浮かぶ。どちらの家にも、沙帆子の受け入れ態勢が整っている。

……新学期を迎えるときには、どうなっているかわからない。

親たちの考えをはつきりと聞きたいが、そんなことをしたら藪蛇になりそうだ。

「あの、先生？」

「……うん？」

沙帆子の呼びかけに、一拍遅れて返事をする。

「あつ、何か考え事してました？」

「いや……それより、何か言いたいことがあるんだろ？　なんだ？」

「は、はい。……あの、今日は一緒にマンションに帰るんですよ？」

沙帆子の両親が引越すまでの間、彼女の実家のアパートで夕食を一緒に取ることになっているのだが、今夜は、ご近所との送別会の予定があるのだそうだ。

「なんで遠慮しながら聞く？　そんなこと、聞くまでもないだろ」

苦笑しつつ言ったら、沙帆子が照れたように笑う。

「そ、そうなんですけど……それじゃ、お弁当も、先生の部屋で一緒に食べられます？」

頷こうとした啓史だが、躊躇ためらいが生まれてしまい、思わず彼は口ごもった。

これまではあまり気にせず、沙帆子を学校の俺の部屋に入れていたが……今後はそういうのも、やめたほうがいいのかもしれない。校内では、なるべく接触を控えて……

ああ、くそっ！　正しい判断を下そうとすればするほど、イラついてくる。

「先生？」

「沙帆子……」

「はい」

深刻そうに呼びかけてしまったせいで、沙帆子が緊張を帯びた返事をする。そのとき、ふと思いついた。そうだ、俺の部屋より、いい場所があるじゃないか。

「果樹園の家で食べないか？」

「あ……ああ、いいですね。あそこなら、わたしも大変じゃないし……」

その言葉に、啓史はつい噴き出してしまふ。

沙帆子の言う大変とは、あの垣根の穴をくぐることに違いない。

「そうだな。お前、あの穴をくぐらないで済むもんな。俺の楽しみは減るが」

「もおっ、先生。そんなこと、楽しみにしないでください」

むっとした声に、啓史は笑った。

### 3 怖いぐらいのしあわせ　　（沙帆子）

先生と一緒に、果樹園の家でお弁当を食べるのか。なんかワクワクしちゃう。

車の助手席で、沙帆子が胸を弾ませていたら、もう果樹園の近くまできていた。

先生と一緒にだと、ほんと時間の経つのが早いんだよね。

にまにましながら、しあわせ気分を味わっていると、車の進行方向に自転車に乗った同じ学校の生徒がいるのに気づいた。焦った沙帆子は、慌あわてて身を屈かがめた。

「おい、そんな風に動揺するな。化粧をしている意味がないぞ」

「そ、そうでした」

啓史の指摘に、顔を赤らめた沙帆子は、ぎこちない動きで姿勢を元に戻す。

自転車に乗った生徒は、すでに車の後方にいる。

こんなことくらいで焦って、先生から見たら馬鹿みたいかもしれないけど……

「でも、顔を見られないほうがいいと思うし……もし相手が知っている生徒だったりしたら、わたし、校内で顔を合わせたとき、普通にされてられないんじゃないかって……すみません」

駄目駄目な自分が情けなくなり、沙帆子は肩を落として啓史に謝った。

「謝るな。俺こそ、その……すまない」

啓史が謝ってきて、沙帆子は驚いた。

「先生？」

「お前の言う通りだ。これからは化粧をしていても後部座席に乗るようにしろ。そのほうが、お前は気が楽だろうからな」

そう言ってもええ、啓史の気遣いが嬉しい半面、沙帆子は寂しい気持ちにもなる。

「本当はわたしも、できれば助手席に乗りたいです」

「卒業したあとなら、そうできる。……そうだな、これも、いまだけの特別だと思えばいいんじゃないか？」

啓史の言葉に、沙帆子は目を見開いた。

いまだけの特別って、いいかも。そんな風に思えば寂しくない。

「今日も三者面談だから、午前中で終わらだろう？ 一緒に弁当を食ったあと、お前はそのまま果樹園の家で時間潰しとけ。テレビでも観て、俺の仕事が終わるのを待ってればいいさ」

「はい。それじゃ、そうさせてもらいます」

正直なところ、先生の側で過ごしたかったけど……我が侬は言えないな。

先生が、そう提案してきた理由もわかるし……

啓史の部屋に沙帆子が行くのは危険を伴う。

先生もだろうけど、わたしだってそのことはわかっていたんだよね。でも、先生の部屋で一緒に過ごしたくて……考えないようにしていただけで。

あの部屋で佐原先生と一緒に過ごす機会は、もうないのかも……

仕方のないことだと理解していても、沙帆子は胸が塞いでならなかった。

果樹園の家で制服に着替えていた沙帆子は、昨日学校であったことを思い出し、ため息を吐いた。時を戻せるものならば、啓史のセーターを着ようとしている自分をなんとかしても止めるのに。

ほんと、馬鹿なことしちゃった。クラスメイトに、セーターを『彼氏の？』と聞かれて有頂天になった自分を思い返すと、いたたまれないほど恥ずかしい。

支度を終えた沙帆子は、最後に化粧がちゃんと落ちているか、もう一度鏡で確認した。

うん、大丈夫そう。

部屋を出て階下に急ぐ。また時間に余裕はあるが、啓史を待たせているので、気が急いでしまう。

「先生、お待たせしま……あ、あれっ？」

先生がいない。もしや、昨日と同じように、校長先生に呼び出されたとか？

沙帆子は慌てて携帯を取り出すが、啓史からのメールや着信は届いていなかった。

わたしに何も言わずに行っちゃうはずないと思うんだけど……

あっ、もしかして、先に外に出て待つててくれるんじゃない？

沙帆子は通学鞆を手に玄関を飛び出した。すると、そこにあるはずの啓史の車がない。

な、なんで？ 先生、いったいどこ行っちゃったの？

その場でおろおろしていたら、車が近づいてくる音が聞こえてきた。

よ、よかった。沙帆子は車に駆け寄って行った。すぐに啓史が車から降り立つ。

「なんだ、もう着替えを終えたのか」

「先生、どこに行ってたんですか？ 何も言わずに車ごといなくなってるから……」

つい咎めるように言ってしまう。

「悪い。お前が着替えてる間に、戻れると思ったんだが」

そう口にしなから、啓史は沙帆子の頭にぼんぼんと軽く触れる。そして両手に持っているレジ袋をひよいと持ち上げて見せた。

「コンビニで色々買って来た。ほら」

レジ袋のひとつを差し出されて受け取る。玄関に向かう啓史のあとを追いつながら中身を確かめると、チョコレートやスナック菓子が入っていた。

そ、そうか。先生、わたしがここでひとりで過ごさなきゃならないから……

啓史の気遣いが嬉しくて、胸がきゅんとする。

ダイニングのソファに並んで座ると、啓史はもうひとつのレジ袋からりんごジュースを手渡してきた。

「ありがとうございます。あの、お菓子もありがとうございます」

「適当に選んだけど……それでよかったか？」

「はい」

先生がわたしのために買ってきてくれたんだもの。どんなものでも、ありがたくいただく。

啓史は缶コーヒーを開けて飲み始めた。沙帆子もりんごジュースを飲む。

先生、わたしのためにあれこれ気を遣ってくれて、泣きたいほど嬉しい。もちろん、ここでひとりで過ごすのは寂しいし、先生のところと一緒に過ごしたいというのが本音だけど……でも、ふたりの生活を守るためだもの、我慢しよう。

そのあと、時間に余裕を持って果樹園の家を出た。肩を並べて果樹園の小道を進む。

ふふっ、陽気がいいし、これから学校って気がしないな。休日に、のんびり散歩している気分になっちゃう。

ウキウキしながら歩いていたら、啓史が「桃の木……」と口にした。

「もう蕾が膨らんでくるな」

「あっ、ほんとですね」

枝を広げているだけのように見えたのに、もうちゃんと蕾がついている。

「もうすっかり春なんです。こんな陽気が続くと、桜もそろそろ咲くかもしれませんね」  
「……そういえば……」

何か思い出したらしい啓史を、沙帆子は見つめた。話してくれるのを待っていると、彼は、どうしたのか沙帆子の顔をじっと見つめてくる。

「な、なんですか？」

「いや……ちよつと思ひ出した」

「何をですか？」

どうしてか、沙帆子の胸が切なく疼く。

彼のいまの表情のせいかもしれない。なんだか、少し思いつめたような……

「桜の花びらが舞っていたのを。……懐かしいな。あれから、もうすぐ一年になるんだな」

啓史は懐かしいと口にしたが、その表情はひどく憂いを帯びている。

そんな表情をするなんて、いったいどんな思い出なんだろう？

「二年の始業式の日……お前も桜の花びらが舞ってるのを見たか？」

去年の始業式の日か。わたしにとっては、とんでもなく思い出深い日だ。

「桜が咲いていたのは覚えてるんですけど、それよりも、貼り出されたクラス分けの表に先生の名前を見つけた衝撃のほうが強烈で……」

「俺の？」

「はい。千里や詩織とクラスが一緒だつてわかつて大喜びしてたら、副担任の名前が『佐原啓史』

になって……もう目を疑っちゃいました。先生の名前を凝視しちゃって……」

あのとときの自分を思い出すと笑えてくる。同時にあのととき感じた喜びが、どんどん溢れてきた。

「そうか……俺は……」

そう呟きながら、啓史は沙帆子の顔を覗き込んでくる。その距離の近さに、沙帆子の顔が赤らむ。

「あのとときの俺は、その偶然を素直には喜べなかった」

「えっ？」

「まさか、お前のクラスの副担任になるなんて……神にもて遊ばれてる気がしたな」

それって、どういう意味で先生は口になっているんだろう？

「俺、そのときから危機感を抱いていたんだと思う。理由もわからず、お前のことが気になつて……お前と顔を合わせることで、俺の中でお前の存在がどんどん膨らんでいくような気がして……凄く不安だった」

啓史の告白に、沙帆子は息を止めた。夢としか思えない告白だ。

「わ、わたし……身に余るといふか……」

「身に余る？」

沙帆子はこくんと頷いた。そして、啓史にそつと身を寄せた。嬉し過ぎて涙が零れそう。

泣くのを我慢していると、啓史は彼女の身体をそつと抱き締めてくれる。

夢のような現実……しあわせすぎて怖いくらいだった。

ふたりは、果樹園と学校の敷地の境にある垣根の扉の前にやってきた。啓史は鍵を開けると、振り向いて沙帆子を見る。

「お前、先に行け」

「先生は？」

「用心して、少しあとから行く」

これまで、何度もふたりしてこの扉をくぐり、啓史の部屋である化学準備室まで一緒に歩いて行っていたことを考えると、いまさらではあるが……

「これからは、もつと用心したほうがいいからな。……だろ？」

沙帆子は頷き、「そ、それじゃ……学校が終わったら、果樹園の家に行きますね」と言う。

「ああ。鍵はちゃんと持ってるな？」

「はい。垣根と、果樹園の家の鍵、どちらも鞆の中に入ってます」

「そうか。ほら、行け」

沙帆子を促し、啓史はその背を軽く叩いた。扉を抜けた沙帆子は、一度だけ振り返り、躊躇いを見せつつも駆けて行った。

ひとりになり、物寂しい気持ちにとらわれる。そんな自分を啓史は笑った。

同じ学校にいて、昼にはまた会えるってのにな。

沙帆子と充分間を開けてから、啓史は扉をくぐって自分の部屋に向かう。

歩いている途中で、携帯に電話がかかってきた。確かめると、伯父の広勝からだった。

「はい」

「啓史、困ったことになった。校長室に急いで来てくれ」

憂鬱ゆううつそうな広勝の声に、啓史はどきりとした。

「何があったんですか？」

「とにかく来てくれ。電話で話していても埒らちが明かないからな」

「すぐに行きます！」

叫ぶように答えて駆け出す。

俺の結婚相手が、沙帆子だとバレたのか？

広勝の様子から、そうとしか思えない。

くそっ！

俺が辞めさせられるのはいい。だが、沙帆子が退学になる事態だけはなんとしても避けたい。

沙帆子が傷つくようなことになったら……俺はどうすればいいんだ？

走りながら、悪い方にばかり考えてしまい、気分まで悪くなってきた。校長室に向かっている途

中で、教職員や生徒たちとすれ違ったが、挨拶をする余裕もなかった。

校長室に到着した啓史は、ドアをノックし、返事も待たずにドアを開ける。

「伯父さん！」

血相を変えて部屋の中に入ったら、広勝以外にもひとがいて、啓史は驚いた。

広勝と向かい合って座っている男性教諭が、首を回してこちらを見る。

「佐原先生」

広勝が改まって呼びかけてきて、啓史は顔を向けた。

「はい。あの……急用とのことでしたので、何かと慌ててしまいました。申し訳ありません」

啓史は、広勝を『伯父さん』と呼んでしまったことを言外に含めて、ふたりに詫言じた。

それにしても、この男性教諭がここにいる理由はなんなのさ？

まさか、この教諭に、俺の結婚相手がバレたとか……そういうことなのか？

「佐原先生、君もこちらにきて座ってくれ」

広勝が促してきたので、啓史はふたりが座っているソファに歩み寄り、男性教諭の隣に座る。

状況がまったくわからない以上、こちらからは話を切り出せない。広勝と男性教諭の表情は見るからに深刻そうで、不安がさらに膨らんでいった。

こうなったら、腹を括ろ。すでに最悪の心づもりはしたはずだ。啓史はふたりの話を待った。

「実はだな」

しばらくして広勝が口を開き、啓史は頷いた。何を言われても、受け止めるしかない。

「物理の教諭が、複雑骨折で入院したというんだ」

は？ 物理の教諭？

一瞬、ぼかんとしてしまう。

「先ほど連絡を受けて、教頭が様子を見に病院に向かってくれたんだが……」

くそつ、伯父貴の奴！ 紛らわしいことを。

朝っぱらから、憂鬱そうな声で『困ったことになった』なんて言うから、てっきり俺たちのことがバレたのかと思つたつてのに……まったく関係なかったのか。

腹の中は怒りで煮えくり返っていたが、一見、冷静そうに「そうなんですか」と相槌を打つ。

隣の男性教諭は、すでにこの話を聞いていたらしく、小さく何度も頷いていた。

そういえば、この男性教諭は、一年の生物担当の教諭だったな。

まあ、とにかく、不幸に見舞われた物理教諭のことは気の毒だと思いが……ほっとした。

「なんでも、退院まで二ヶ月はかかるらしいんだよ」

その言葉に、啓史は眉を寄せた。

「二ヶ月も……ですか」

確かにこれは困った事態だ。新学期になっても物理の教諭がいけないのでは……

「臨時の教諭を探すしかないですよね？」

「そうなんだが……なかなか難しいだろうな」

広勝の言葉を聞き、生物の教諭も同意するように頷く。

そうか、俺がここに呼ばれた理由がわかった。

つまり、もしも臨時の教諭が見つからなかった場合、同じ理科系科目を受け持つ自分たちに助けを欲しいということなのだろう。

「臨時の教諭はなんとしても探すつもりでいる。だが、どうしても見つからなかった場合、なんとか助けて貰えないだろうか？」

やはりか。確かに、臨時の教諭が見つからなかったら、同じ理科系科目担当の教諭が、助けに回るしかない。

「まあ……ここはお互い助け合おうしかないと思いますし、協力させていただきますが……」

生物の教諭が困り顔ながらも広勝の申し出を受け入れ、啓史も頷く。

「私も協力させていただきますよ」

「よかった。ありがとう。もちろん君たちの負担にならないように、とにかく急いで臨時の教諭を探してみる。だが、万が一の場合は、すまないがよろしく頼むよ」

生物の教諭は、啓史と同じように頷いたが、かなり気が重そうに部屋を出て行った。

広勝とふたりになり、啓史は広勝に向き直った。

「さんざん冷や汗をかかされたのだ、文句のひとつも言ってやりたい。」

「伯父さん」

「なあ、啓……うん、何だ？」

「いや……伯父さんこそ、何？」

「ああ……なあ啓史、お前は、もともと物理の教諭をやりがつていただけだろ？」

「まあ、そうだけど……何、俺に二足のわらじを履けとか言いたいわけ？」

「まさか、そこまで無茶は言わん。ただ、お前にとつては……たった二ヶ月だろうと、やりたかったことができるチャンスだろう？」

「確かにね。でもいまは、俺より生徒たちを一番に考えてやってほしいよ」

「それはもちろんだ」

「もし物理の授業を引き受けるのなら、俺も十分な準備をしたいし……」

「すまんな」

「謝られることじゃないよ。伯父さんがさっき言ったように、短い期間でも経験できるのはありがたいと思う」

「そうか。……おお、それとな、お前に朗報があるんだ」

「朗報？」

「実はな、例の、産休で休んでいた英語の教諭が、ついに復帰することになったんだ」

「えっ？ 本当ですか？」

それは、啓史がずっと望んでいたことだ。いつ復帰するのかと、広勝に繰り返しつついていたのだ。なせ、その産休の英語教諭の代理が、啓史をさんざん悩ませているバケ子女史なのだ。

バケ子女史というのは、化粧の濃い女性教諭のことで、啓史はことあるごとに過剰なアプローチをされてきた。彼女が辞めるといふなら、まさに朗報だ。

「ああ。こんなことで嘘は言わん。新学期から復帰してくれる」



「ありがたいですよ。これでようやく……」

「ああ、ただしな」

「ただし？ ……なんですか？」

「復帰してすぐフルタイムで働くのは自信がないから、三ヶ月ほど臨時教諭として勤務したいそうなんだ」

「それって……」

「ああ、それまでは、お前が天敵とする彼女も、ここに居続けるといことになるな」

「なんだ。ぬか喜びしたじゃありませんか」

「だが、これで、三ヶ月という期間が決定したんだぞ。悪い話じゃあるまい？」

「それは……まあ、そうですね」

話も終わり、そろそろ職員室に行こうと啓史は立ち上がった。

ドアに向かっていたところで、ふと思い出し、啓史は広勝を振り返った。

呼び出しの説明が足りず、意味もなくビビらされたことに対して、まだ文句を言っていないかった。

「伯父さん」

「うん、なんだ？」

「さっきの伯父さんからの電話だけど、俺たちのことがバレたんじゃないかと思って、凄くビビらされた。最初に用件を言ってくれば、俺もいたずらに不安にならずに済んだんだけど……」

「ああ、そうだったか……すまん。そういうことは、ちっとも考えとらんかった」

軽い感じで謝られ、イラっとする。

広勝はさらに、「けど、そうじゃなかったんだから、よかったじゃないか」とのたまう。

まったく反省を感じられない台詞に神経を逆なでされ、啓史は冷やかな目で伯父を見つめた。

「へえっ……よかった、で済ませるわけ？」

「う……ま、まあ……こ、今後は充分注意しよう」

広勝は視線を泳がせながら口にする。

「ぜひ、そのように取り計らっていただくよう、お願いしますよ」

剣呑な表情で丁寧に頼み、広勝に向けて頭を下げた啓史は、校長室をあとにした。

## 5 困った課題 ー 沙帆子 ー

階段を上がり、教室に向かっていた沙帆子は、廊下に千里がいるのに気づいた。

千里は、森沢と広澤のふたりと立ち話をしている。

「あつ、沙帆子」

沙帆子がやってきたのに気づいた千里は、手を上げて呼びかけてくる。沙帆子は一瞬躊躇ったあと、三人に歩み寄った。彼らには昨日、とても迷惑をかけてしまったので、正直、顔を合わせるのが恥ずかしかった。

「お、おはよう。あの、昨日は色々と……ごめんなさい」

沙帆子は顔を赤らめて、三人に頭を下げた。

セーターの一件で、我を忘れるほど動揺してしまった沙帆子を心配し、彼らは母の芙美子に迎えを頼み、啓史にも知らせてくれたのだ。

「いや……その……」

広澤が困ったようにぼそぼそと口にし、沙帆子は彼に視線を向けた。すると目が合った瞬間、広澤が意を決したように、突然真剣な眼差しになる。沙帆子が彼の変化に戸惑っていると……

「セーター、今日は着てこなかったんだね」

広澤の言葉に、沙帆子は目を見開いた。まさか、彼がそんなことを言うなんて。

「あ……う、うん」

他に言いようがなく、沙帆子は俯いた。正直、わけがわからなかった。広澤もだけど、いつもなら、即座にフォローしてくれる千里は黙ったままだし、森沢も同じだ。

「昨日、あんなことがあったんじゃないか？」

広澤は残念そうに口にし、困ったような笑みを浮かべる。

沙帆子はいつそうわけがわからなくなった。

「榎原さん、気にせずじまた着てくれればいいよ。それより、今日の授業が終わったら、いつもの場所集合な」

森沢が三人に向けて言う。千里は頷き、広澤は「了解」と答える。

そこで沙帆子は、不自然なこの会話には、きつと何か理由があるんだろうと気づいた。

「あ、あの……」

戸惑いつつも、沙帆子が話しかけようとしたら、千里が「ああ、そうだったね」と返してくる。そうだったって……いったい？

「わたしたち、帰りに図書室に寄ろうって約束してたの」

「そうか。なら、僕らも図書室に行くよ」

森沢の言葉に千里が頷くと、森沢と広澤は揃って手を振り、自分のクラスに戻って行った。

「わたしたちも教室に入ろう」  
沙帆子は千里に促されるまま、教室の隅つこに引張って行かれる。室内はかなりざわついていてるし、ここでなら会話を聞かれる心配はなさそうだ。

「千里、いまのって？」

沙帆子は声を潜めて千里に問いかけた。すると千里が、折りたたんだ紙を手渡してくる。

「これは？」

「いいから読んで」

千里から小声で言われ、沙帆子は紙を開く。そこには、先ほどの会話が書かれていた。

「これって!？」

「そういうこと」

そうか、いまの不自然な会話、三人ともこの台本通りに口にしてたんだ。

以前、森沢から、沙帆子と啓史の結婚がバレないようにするためには、沙帆子と広澤が付き合っている風を装うのが最善の策だと言われたことがある。

でも、そんなのは啓史だつて嫌だろうし、広澤のことが好きな詩織だつて、辛いだろう。だから沙帆子は、広澤と付き合っているふりはしたくないと、森沢にはつきりと伝えたのだ。

あのときは納得してくれたようだったのに……

とはいえ、相談もなく突然こんな手段を取ったのは、きつと昨日のことがあつたからなんだろう。沙帆子の着ていたセーターが、啓史のものと同じと似ていると指摘したクラスメイトがいて、それが元で、沙帆子が啓史の結婚相手ではないかと、騒ぎになってしまった。たぶん森沢は、今後のためにも、その疑いを、完璧に消してしまふ必要があると思つたのではないだろうか？

「これを作ったのは、森沢君なのね？」

確認すると、千里が気まずそうに頷く。そして潜めた声で話し出す。

「これだと、完全にあなたの相手は広澤君つてことになるし、最初は反対したんだけど……大樹に説得されちゃつて」

千里は肩を落とし、表情を曇らせている。そんな千里を見て、沙帆子は泣きたい気分になった。

千里つてば、わたしの気持ちを考えてすまないと思つてるんだ。これがわたしのためだと判断したからこそ、千里はやつてくれたに違いないのに……

沙帆子の胸に、深い感謝が湧き上がる。

「沙帆子？」

黙り込んだ沙帆子に、千里が不安そうに呼びかけてくる。

沙帆子は顔を上げて、千里に笑みを見せた。

「ありがとう」

「えっ？」

「わたしのために最善を考えてくれて……ありがとうね」

「沙帆子……」

千里は硬い表情で沙帆子の手を取り、ぎゅつと握る。

「あなたはわかつてくれるつて大樹も言つてたけど……わたし……」

その言葉で、千里の気持ちが充分に伝わってくる。

「これ、森沢君ひとりで考えたの？」

笑いながら尋ねたら、千里はほっとした表情になり、頷いた。

「自然な会話になるようにつて考えたらいいんだけど……ちよつと回りくどかつたわよね？」

思わず笑つてしまう。すると千里も笑みを見せてくれた。

でも、これからどうなるんだろう？ 広澤君と付き合っているのは、わたしだということでも通すんだろうか？ わたしか詩織かわからないようにするつて話は、もうな什つてことなのかな？

それに、このことが先生の耳に入ったら……

啓史の顔を思い出し、途方に暮れた沙帆子だが、すぐにそうじゃないと思ひ直した。

啓史の機嫌が悪くなるのではないかと気にして、彼に隠そうとするなんて間違っている。啓史が

どんな反応をするかなんて関係なく、彼にはすべて伝えるべきだ。

今夜にでもちゃんと話そう。そう決めたら、心が軽くなった。

「図書室は、ほんどに行くの？」

「実はそれ、最初は台本になかったのよ。わたしが図書室で本を借りたと言って言ったものだから、大樹が急遽書き加えたの。……ほんの十分くらいだから、付き合ってくれないかな？」

「それって、詩織も一緒？」

「もちろん一緒よ」

そう聞いてほっとしたが、詩織の気持ちを思い、切なくなる。

「沙帆子、詩織のことは気にしないでいいよ。わたしがちゃんとフォローするから」

千里ってば、わたしが何も言わなくても、気持ちを理解してくれるんだなあ。

「うん。それじゃ、お願い」

千里はにこっと笑って頷いた。

そうだ。図書室に行くのなら、わたしも本を借りようかな。

啓史が仕事を終えるまで、果樹園の家で、ひとりで過ごさなければならぬのだ。本を読みながら待つとしよう。

帰りのホームルームが終わると、沙帆子たちはすぐさま教室をあとにした。

廊下に出た沙帆子は、昨日、セーターのことで言いがかりをつけてきた子たちがいないかと、周

りを窺う。休み時間にトイレに行くのにも、また何か言われたらと、ヒヤヒヤしてならなかった。

もちろん自分が嫌ということもあるが、自分のせいで千里や詩織に嫌な思いをさせたくない。

幸い教室を早く出たおかげで、他の生徒には会わないまま図書室までやってこれた。

あの子たち、まさか図書室にいたりしないわよね？

図書室に入り、ささっと周囲を見回すが、生徒の姿はなくほっと胸を撫で下ろす。

沙帆子はさっそく目的の書棚に足を向けた。

読みたいなど思っていた本が見つかり手に取る。

「沙帆子、あんたも本を借りるの？」

分厚い本を数冊手にした千里が尋ねてきた。詩織は別のコーナーを回っているようだ。

「うん。読みたかった本があったから……」

「でも、読む暇なんてあるの？」

「実はね、今日はアパートには行かないことになったの。……け、啓ちゃんの仕事が終わるのを待つ間、本でも読もうと思って」

「それって……啓ちゃんの部屋でってこと？」

千里は沙帆子に顔を寄せ、心配そうに問いかけてきた。

「ううん。違う場所」

「違う場所って、例の秘密の場所？」

秘密の場所というのは、化学室のある棟と垣根で隔てられている中庭のことだ。

「そこじゃなくて……校長先生が使わせてくれてる場所があるの」

千里は首を傾げ、沙帆子を見つめてくる。

「校長先生がってことなら、大丈夫そうね。そういう場所があるってわかって、安心したわ」

千里はそう言うと、書棚の本の背表紙に指を滑らせながら、話を続ける。

「……考えてみたら、頼りになる大人が味方にいるんだものね。だったら、そこまで心配しなくてもいいんだなと思って、気持ちが一気にラクになったわ」

「千里……ほんとにありがとう」

千里の気持ちが嬉しくて、「涙ぐみそうになる。迷惑ばかりかけてしまっているのに、嫌な顔ひとつせずに、わたしたちのために色々考えてくれて……それは詩織も、森沢君も広澤君も同じで……」

「あつ、そうだわ。ねえ、沙帆子、午後が空いてるんだったら、一緒に遊ばない？」

「えっ？」

「そうしようよ。しばらくあんたとは遊べないと思ってたけど……詩織も喜ぶわよ」

言われてみれば、その通りだ。春休みはほとんど予定が埋まっっていて、三人で遊べる時間はなさそうだ。それなら、本を読んでひとりですごすより、ふたりと遊びたい。

「それじゃ、これから啓ちゃんと一緒に弁当食べるから、了解取ってくるね。でも、遊ぶって、何を遊ぶの？」

「そうねえ……久しぶりにゲーセンとかどう？」

「なあに、ゲーセンって？」

ふたりの会話を小耳に挟んだようで、詩織が会話に混ざってきた。詩織は、詩集を持っている。

「あら、詩織、あんた詩集を借りるの？」

「小説より文章が短いし、とっつきやすそうじゃん？」

「そういうもんじゃないと思うけど……。まあ、いいわ。実は、沙帆子が今日の午後空いてるっていうから、一緒に遊ぼうという話になったのよ」

「ええっ？ ほ、ほんと？ 沙帆子ほんとに遊べるの？」

興奮した詩織は、詩集を持ったまま沙帆子の腕を掴んでブンブン振る。

「し、詩織、詩集が飛んでっちゃうよ」

そう注意した瞬間、詩集が詩織の手から離れる。

「あっ！」と叫ぶだけの沙帆子たちとは違い、反射神経のいい千里は、さっと手を伸ばして本をキャッチしようとした。だが、僅かに届かない。

三人して本の行方を追うと、どこからともなく現れた男子生徒が、飛びつくようにして詩集をキャッチした。

あまりの見事さに、「わあっ！」と歓声を上げてしまう。すると、千里が「大樹」と呼びかけた。

森沢は本を手にしてこちらに歩み寄ってきた。彼の後ろには広澤もいる。

「ご、ごめんなさい。森沢君、キャッチしてくれてありがとう」

謝罪とお礼を口にする詩織は、真っ赤になっただけで済んでいる。いまの騒ぎを好きなひとに目撃されて恥ずかしいのだろうが、真っ赤になってもじもじしている詩織は、とっても可愛い。

「さすが森沢だな」

広澤が声をかけると、森沢は軽く肩を竦め、千里のほうを向く。

「それで千里、もう本は借りたのか？」

「まだなの。急いで借りてくるわ」

千里が駆け出し、沙帆子も慌ててあとについて行く。

「急がなくていいよ。僕らも借りるつもりだし……」

「あのっ、森沢君。そ、それ」

詩織は詩集を森沢から受け取り、沙帆子たちのあとを追ってきた。

「あー、恥ずかしいところ見られちゃったよお」

カウンターで本を借りる手続きを待ちながら、詩織はしょぼくれてぼやく。

「あなたは、もうちよつと落ち着きなさい」

詩織は、お小言とともに千里にデコピンされる。頬を膨らませる詩織を見て、沙帆子は笑った。

ふたりとこうしていられることが、嬉しくてたまらなかった。

「昨日、榎原さんに言いがかりをつけてたっていう子たちのことなんだけどさ」

図書室を出てすぐ、森沢がそんなことを言い出したので、沙帆子は驚いて彼に顔を向けた。

「あの子たち、また何かやったの？」

千里は眉をひそめて森沢を問ひ質す。

「ええ」

「ええ」

「ええ」

「広澤を呼び出して、セーターのことを聞いてきた」

「広澤君、なんて答えたの？」

「正直、どう答えようか迷ったんだけど……肯定するのもどうかと思ったんで、『君らには関係ないし、答える義理もないだろ』って答えた」

「ああ、いいんじゃない」

千里はそう言ったが、森沢は気難しい顔をする。

「うーん、けど、充分に反感を買ったぞ。榎原さんに八つ当たりするかもしれない」

「あの子たちならするかもしれないわね。ほんと最低」

「仕方がないさ、色んなひとがいるのが世の中だから。とにかく、今後もあの子たちには気をつけようがいい」

「わかったわ」

「沙帆子っ、心配しなくてもいいからね、わたしたちがついてるからね」

詩織が元気つけるようにそう言ってくれて、沙帆子は感謝を込めて頷いた。

「ゲーセンで遊んでたら、その子たちがやって来たりしてね」

千里が言うのと、森沢が「君ら、このあとゲーセン行くの？」と聞いてきた。千里が「ええ」と頷く。

「ふーん。なら、僕も付き合おうかな。広澤、君はどうする？」

「別に予定はないし、飯沢さんたちが構わないのであれば、付き合おうよ」

えっ、ふたりも一緒に行くの？ それは、ちょよ、ちょつと困るかも。

森沢君はいいとしても、広澤君も一緒っていうのは……佐原先生がどう思うか……

千里がこちらに視線を向けてきた。

「沙帆子。啓ちゃん、許可してくれると思う？」

「う、うーん、聞いてみないと……」

「えっ、榎原さんもゲーセン行くの？」

広澤が驚いたように口にし、森沢も「そうなのか？」と聞いてくる。ふたりとも、ゲーセンに行くのは千里と詩織だけだと思っていたらしい。

「チャンスではあるけど……啓ちゃんは怖いな」

苦笑しつつ森沢が言うので、沙帆子は驚いた。森沢君まで『啓ちゃん』呼びするなんて……

「啓ちゃん？」

戸惑ったように広澤が首を傾げるが、すぐに「あつ、それって……」と気づいたようだ。

「そういうこと」

「イメージ違いすぎて……あれだな。それに、命知らずな気がする」

「確かにな。けど、イメージが違いすぎるからこそ使えるんだろ。……それで？ 榎原さん、僕ら

も一緒にいいかい？」

森沢は改めて沙帆子に聞いてくる。

「沙帆子、とにかく啓ちゃんに許可を取ってみなよ。結果はメールで知らせて」

迷っていたら千里がそう言ってくれて、沙帆子は頷いた。

「わかった。それじゃ行ってくる。またあとでね」

早いところ果樹園の家に行かないと。先生、もう果樹園の家に着てるかもしれない。

「あの子たちに見つかって、いちゃもんつけられたりしないように、気をつけて行くんだよ」

詩織が心配して声をかけてくれる。

「遭遇しちゃったら、捕まらないうちに走って逃げるよ」

沙帆子はわざと真面目に答えると、詩織が笑う。

沙帆子がこれから啓史のところに行くとは知らなかった森沢と広澤だが、三人のやりとりから、どういふことか事情を汲み取ったようだ。

みんなと別れ、走り出したものの、なんとも気が重い。

広澤君と一緒に遊ぶことになったなんて、先生に言いにくいよお……

困った課題を抱えつつ、沙帆子は果樹園の家に急いだ。

## 6 教師と夫 〈啓史〉

「おっ、もうこんな時間か……」

仕事に集中していた啓史は、時間を確認して慌てて立ち上がった。

とつくに昼休みになってしまっている。沙帆子はもう果樹園の家で待っているに違いない。焦って机の上を片付けていたら、携帯に電話がかかってきた。急いでポケットから携帯を取り出し、相手を確認する。

「時田か」

時田は敦や深野と並ぶ、啓史の友人のひとりだ。

「よう、時田。何か用か？」

片手で片付けを進めつつ、尋ねる。

「例の行事、もうやったのか？」

例の行事？

「いったい、なんの話だ？」

「メイドさんだ、メイドさん。あれからだいぶ経つし、もうやったんじゃないのか？」

そうだった。以前、なぜか芙美子さんに俺が沙帆子のコスプレ写真を撮っていると誤解されて、急遽、メイド姿の沙帆子の写真を撮ることになったのだ。

それで、メイド服を買うのに、デパートに勤務している時田に相談して買物に付き合わせたんだ。あれはもう、三週間くらい前のことになるのか。

「見せてくれよお。高校生のメイドさん、可愛かったら？」

確かに可愛かった。可愛すぎて、学園祭のとき、あいつが他の男たちに肩を抱かれていたことを思い出してイラついたあげく、沙帆子に八つ当たりしてしまった。

そういえば、あのとときの写真、あれきり見る暇もなかったな。今夜戻ったら見てみるか。

黙り込んでいたら、時田が「おーい、佐原？」と、返事を催促してくる。

「見せるわけがないだろ」

「ちえっ。なんだよお、ケチだな」

「用事がそれだけなら、切るぞ」

すると、「ちよつと待てよ！」と、焦った声が聞こえ、仕方なくもう一度携帯を耳に当てる。

「本題があんだよ」

本題か……それで予想がついた。きっと、俺に彼女ができたという話だろう。

「深野から、お前に彼女ができたって聞いたんだけどさ、ほんとなのかよ？」

そう口にする時田は、半信半疑のようだ。

「ああ」

「うへーっ、この野郎、あっさり肯定しやがった」

時田は愉快そうに笑う。

深野の奴、こいつにも、あれこれ余計なことを話したんだろうか？

すでに敦から、それをネタにからかわれていた。時田も、俺をからかうつもりでかけてきたのだから、みすみすそんな流れに持っていく気はない。

「そんなことより、深野のこと聞いたら？」

「お、おお！ そうそう、あいつ……って、ちよつと待てよ！ まずはお前の彼女のことだろ」



文句を言われ、内心、チツと舌打ちする。

「その話に割く時間はない。俺は暇じゃないんだ。深野についてなら、そうだな三分やろう」  
「さ、三分だあ？」

「時は刻々と進んでいるぞ。二分五十五秒……」

「まったく！ お前、冗談で済まさないからな。そんなんで、なんで誰にも嫌われないんだよ？」  
「知るか。二分五十秒を切ったぞ」

「深野とミス白百合のことはいい、お前の彼女のこと、教えてくれよ。名前は？」

好奇心剥き出しの声に、嫌気がさす。

「その話に割く時間はないと言った。じゃあな」

「ちよ、ちよっと待てよ！」

「深野とミス白百合の婚約祝いには、顔を出すつもりだ」

「彼女、連れてくんのか？」

テンションの上があった声で言われ、「さあな」とそっけなく答え、啓史は電話を切った。

たぶん時田は、今頃電話の向こうで、悪態をついていることだろう。再び電話をかけてくるんじゃないかと思ったが、予想に反してかけてはこなかった。

親友ともなると、さすがに啓史の性格をよくわかつているようだ。

さて、沙帆子が待っているから急がないとな。

化学準備室を出て、廊下を急ぐ。すると前方から女子生徒が三人やって来るのが見えた。彼女た

ちは、啓史の姿を見て驚き、キャーキャー騒ぎ始めた。その態度に眉をひそめたものの、このまま前進するしかない。徐々に女子生徒たちとの距離が縮み、あることに気づいた啓史は眉間に皺を寄せた。

こいつら……昨日、沙帆子に失礼な態度を取ったという生徒じゃないか。

啓史のセーターを着ていた沙帆子に、この三人は、ひどい言いがかりをつけたらしい。

実はこれまで、啓史自身もさんざん困らされていた生徒たちだった。

「佐原せんせい」

馴れ馴れしく呼びかけてくる女子生徒たちに、できることなら、沙帆子を傷つけた報復をしてやりたい。もちろん、教師という立場では、そんな真似はできないが……

バタバタと駆け寄ってきた彼女たちに前方を塞がれたが、「急いでいるんだ」と素っ気なく告げて、足を止めずに通り過ぎた。だが、同じ歩調でついてくる。

「わたしたち、佐原先生にお話ししたいことがあって、先生のところに行くところだったんです」

俺に話だと？

「急いでいるんだ。またにしてくれ」

冷たく口にし、そのまま振り切ろうと足を速めたが、女子生徒たちがびったりとついてくる。

「昨日のことなんですけど、二組の榎原さんが、地味なぶつかぶかのセーターを着て……こともあろうに、そのセーターが佐原先生のだって言いふらしてたんですよ」

その言い草に、憤りが渦巻く。沙帆子は言いふらしてなどいないし、その地味なセーターは確か

に俺のだ。はつきりとそう言ってやりたいのをぐっと堪える。

「もちろんそんなわけないって、わたしたちわかっているから、彼女に言ってやったんです」  
啓史はびたりと足を止めた。

ついてきていた彼女たちも立ち止まる。三人は啓史を見て、嬉々とした表情を浮かべる。

正直、憤りが過ぎて吐き気がしてきた。

「その話なら、私も詳しい報告をもらっているが……」

啓史は憤りを抑え、冷静に告げた。

「えっ？」

「ほ、報告って、あの……？」

「君らの発言についても、詳しく聞かせてもらった。……それを踏まえて、他にも何か私に言うことがあるか？」

「ちっ、違います！　そ、そんなの嘘ですよ！」

「嘘？　君は、なんに対して嘘だと言っているんだ？」

「だって、だから……佐原先生が聞いたことです」

「そうです。それ全部嘘ですから！」

その言葉に、啓史は目を細めた。三人を冷たく見据える。

往生際が悪過ぎる。いや、愚か過ぎるのか……

「残念だ。反省を期待したんだが……」

冷ややかに告げ、啓史は歩き出したが、もう一度足を止めて三人を振り返った。彼の迫力に怯えたのか、三人とも顔を強張らせて立ち竦んでいる。

「自分の発言には責任を持って。それと、人を貶める発言は自分を貶めるものだというのを、覚えておきなさい」

啓史が再び歩き始めても、彼女たちはもうついて来なかった。

あの三人は、啓史にとって教え子だ。愚かな行いに対して厳しく指導したつもりだが……そこに私情を交えてしまったのも確かだ。

教師としては反省すべきなのかもしれないが、沙帆子の夫として気分がすっきりしたのも事実。

これから先、また同じようなことが起こったとき、教師として公平な立場を取るべきなのはわかっているが……実際に、そうできるだろうか？

自問自答しつつ、啓史はさりげなく背後を確認した。

さきほどの三人が、自分のあとをつけてくることはないだろうと思っただが、啓史はこれまでとは違う経路で果樹園の家へ行くことにした。用心するにこしたことはない。

7 真剣な眼差し　　沙帆子

これで、よし……と。